

日本の医療や介護を
みんなで考えよう

Vol.6

ICT・AIと医療介護

text by Takeshi Karasawa

文 唐澤 剛

2045年に、人類はシンギュラリティを迎えるという説があります。シンギュラリティとは、AIが人間の能力を超えるということのようですが、では何をどう超えるのかはよくわかっていません。そもそも「超える」というのは、どういう意味なのでしょう。AIが人間を支配するようになるのでしょうか。「支配」というのは、どういう概念なのでしょう。

だんだんわからなくなりますが、AI研究者は、AIが人間を支配するようにになるとか、AIによって人

間の仕事がなくなるとか、そういうことはないと言っています。仕事の内容が変わるだけだといっています。そうすると、問題はどう変わるのかということになります。医療や介護、病院や診療所、介護施設などはどう変わるのでしょうか。おそらく、相当大きな変化が起こることが予想されますが、今の時点でそれを正確に見通すことはできません。

京都大学大学院医学研究科・医学部教授（医療情報学）の黒田知宏先生は、「ネットワークを経由して病院がまちに広がる」と述べています。これを私流に勝手に理解すると、医療や介護が生活を覆いつくして超最先端の医療都市が出現するということではなく、医療や介護が生活の方に近づいてきて「生活と融合した医療や介護」が実現することになるという意味だと理解しています。

2018年の診療報酬改定で、オンライン診療が始まりました。2020年4月からの診療報酬改定で、オンライン診療はもっと拡大していくでしょう。今日では、オンラインを通じた画像は、肉眼と変わりありません。拡大すればもっと鮮明

な画像が得られます。バイタルサインは、モニターやウェアラブル端末で把握可能です。そうすると、できないのは触ることだけになります。もちろん、だからといって外来がなくなってしまうことありません。

私は、自宅は「サテライト病院（病床）」や「サテライト施設」になると考えています。病院や施設が、自宅の方に近寄って来るのです。オンライン診療は、日常的なものになります。

自宅は、生活の場であるとともに、診療やサービスの場になっていきます。その自宅を中心に、医師（訪問診療）、看護師（訪問看護）、PT・OT・STなどのセラピスト、管理栄養士、ケアマネジャー、訪問介護員など地域の様々な職種のチームが、連携してサービスを提供するようになります。「生活と融合する医療や介護」とは、そうしたものになるのではないのでしょうか。それは、地域包括ケアの意味するものと同じものになるのではないかと考えています。

Profile

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授。

1956年長野県安曇野市生。1980年早稲田大学政治経済学部卒業。同年厚生省に入省。2014年厚生労働省保険局長、2016年6月内閣官房まちひととしごと創生本部地方創生総括官。同年8月に退職、12月から現職。

